

原爆文学研究会報

第三六号

原爆文学研究会 二〇一一年一月

被爆体験と「平和利用」 愛知県の被爆者数人が隔月で集まる「自分史の会」に私が顔を出すようになってから二年ほどが経つ。この間うかがった興味深いお話の中で、触発され少し調べてみたことを紹介したい。

幼少期に広島で被爆した女性が高校生のころ、名古屋大学医学部の医師の診察を受けに通っていた。その医師が所属する研究室の教授は白血病の権威で、被爆者はその教授のところへ診察に行くと標語のように言われていたという。診察・採血を直接担当していたのは黒川良康という医師で、実は被爆者の血液検査結果をデータに博士論文を書き名古屋大学から学位を授与されている。その後民間企業に勤務し、さらに動力炉・核燃料開発事業団へと転身した。一時期NHK教育テレビの科学番組にも出演していたという異色の経歴を持つ人物である。黒川医師は父親が広島で被爆し亡くなっていた（本人も被爆者のようだ）にもかかわらず、動燃に転職するぐらいだから、「平和利用」には当然肯定的だったのだろう。また、プルトニウムの人体への影響調査を当初から研究計画の中に組み込んでいたアメリカの核開発体制を日本と比べて「うらやましい」と医学雑誌で述べていた。彼にとつて他の被爆者の血液を調べることは、科学的知識でアメリカの体制に少しでも近づいたためのものだったのかもしれない。

3・11後、福島と広島・長崎が関連づけられることが多くなった。被爆者でさえ「平和利用」の欺瞞を見抜けなかったという「正しい反省」も悔恨の念とともに聞こえてくる。しかし、黒川医師の例をみても、被爆者あるいはその家族だからといって、核開発に対してどのような態度を取るのかは自明ではないと思われる。少なくとも私には、被爆体験と科学的知識や「平和利用」の結びつきをどう考えるべきか、またはつき

りとした見通しはない。ただ、ある被爆者が何気なく語った、あまり知られていないエピソードが手がかりになるかもしれないという気が今ほしている。
(東村岳史)

第三六回 原爆文学研究会報告

二〇一一年九月二十四日(土)、京都大学で開催した第三六回研究会には約二〇名が参加。今回は「被爆の記憶と原子力の夢——原爆文学から問

いなおす——」というテーマでワークショップを行いました。

この会報では当日登壇された山本昭宏氏・中谷いずみ氏・野坂昭雄氏によるご報告の要旨に加え、坂堅太氏と松尾直美氏による研究会印象記をお届けします。報告を受けてからのコメントと全体討議では「なぜ被爆の記憶と原子力の夢が「共存」してしまうのか、それを「共存」と呼んでよいのか」「ジエンダーという切り口をさらに広げることによって、もつと見えてくる問題があるのではないか」「原爆と原発を並べて語ることのメリットとデメリットをどのように考えればよいのか」等の質疑がありました。



◇ 報告 1

1950年代の広島における

被爆体験と原子力への期待感

——サークル誌『われらの詩』『われらのうた』を中心に——

山本 昭宏

民衆主体のサークル運動は一九五〇年代における一大文化運動であり、その成果として無数のサークル誌が発行されていた。広島はサークル誌『われらの詩』（一九四九年十一月～一九五三年十一月…全二〇号、十九冊）と『われらのうた』（一九五四年十一月～一九六三年六月）を取上げた本報告の目標は、主に以下の二点であった。

第一に、核エネルギーに対する広島市民の感情が、短い詩の言葉として結晶化、あるいは類型化していく過程を探ることである。その過程ではどのような政治的課題が共有されていたのか、どのような心情が強調されていたのかを解き明かしたいと考えた。第二に、「被爆の記憶」と「原子力の夢」に関してサークル詩が設定した議題と、『中国新聞』の比較検討である。『中国新聞』が強調したポイントを、サークル誌に集った市井の人々がいかに受容したのか、あるいはしなかったのか、その受容のありかたの解明を図った。

報告の成果としては、『われらの詩』において反戦平和運動と労働運動による「怒り」が定型化し、その文脈で原爆が語られたことによりいわゆる「怒りの広島」が構築されたのではないかと仮説を立てることができた。しかし、「怒りの広島」の構築は、『われらのうた』の時代に原爆詩の類型化として問題視され、一九五〇年代後半以降、表現の刷新を目指してメンバーが同人誌へ流れていく原因ともなった。



山本 昭宏 氏

また、被爆の記憶が短い詩の言葉に結晶化し、それが原子力平和利用言説につながっていく過程を例証することができた。それは具体的には、「怒り」や「呪い」、「悲しみ」というネガティブな言葉が「生きていく」ための「エネルギー」に結びつけられていく過程であった。

さらに、『中国新聞』の紙面からみる地方輿論とサークル誌の比較によつて、市民感情における被爆の記憶と原子力との夢の共存を提示した。負の側面を正に転化することへの期待観に関するならば、『われらのうた』は『中国新聞』のマスメディアによる原子力平和利用キャンペーンを受け入れていたのだといえる。

報告後の全体討議を経て、報告者の仮説にはまだまだ検討の余地が残されていると痛感した。特に、「被爆体験が平和利用言説に繋がらざるを得なかったのはなぜなのか?」、「簡単に、被爆の記憶と原子力の夢の「共存」と言つて良いのか?」、「共存」という言葉では両者の間の力学を見落してしまうのではないか?」という質問には、筆者自身うまく返答することができなかった。今後の課題としたい。

原水禁署名運動とジエンダー

中谷 いずみ

本報告では、原発事故以後の社会状況、特に反原発・脱原発運動の発展について考えるために、一九五四年三月の第五福竜丸乗組員被爆を契機とする原水爆禁止署名運動をとりあげ、運動体の表象が果たす機能について考察を試みた。特に原水禁署名運動が、草の根的に発生し政治的思想的信条を越えて行われた民衆運動として評価されてきた点に注目し、「非政治的」であることを謳う運動がもつ両義性を検証した。

原水禁署名運動が打ち出す「非政治性」は、しばしば「清らかさ」や「純粹さ」と結び付けられ、「党派的」運動の「エゴイズム」の対局にあるものとして語られる。そしてその「純粹さ」の象徴として、同時代の「母親」イメージを援用するかたちで「女性」が前景化されていくのだが、更にここで注目すべきは、このような運動表象の形成が、従来の政治運動との差異化によつて果たされていたという点である。原水禁署名運動は、運動の裾野を広げるべく女性表象を援用するかたちで「非政治性」を打ち出していく。それが幅広い人々の支持を獲得する要因となるのだが、しかし一九五四年という時代においてとらえ返すならば、その方針はむしろ冷戦下の政治体制を支えるようなイデオロギーと微妙に呼応してしまつたといえよう。その例として本報告では、同時期に生じた「京都旭丘中学事件」を取り上げ、政治的と見なされた運動体の闘争とその表象を分析した。

MSA協定発効や自衛隊発足など、経済軍事ともに冷戦下の制度づくりが露骨に進んでいく中で成立した教育二法案（一九五四年公布、施行）



中谷 いずみ 氏

を用意するという、いわば「分裂授業」にまで発展する。メディアは、日教組が学校側を支援したことも含めてこの事態をセンセーショナルに、しばしば誇張を入れて報じた。この事件はあつせんによつて一応の和解をみるのだが、しかし教育二法案審議と重なる時期に起きたため、二法案の成立には首を傾げるが運動側にも問題があるという論調を呼び込んでしまい、結果として「中立」を謳う法案の承認を押し進めてしまふような側面を持つこととなる。更にこの事件をめぐっては世間に受け入れられる運動方式をとるべきという日教組への非難の声もあがつており、一方で原水禁署名運動が展開していたことを踏まえるならば、リアリティのある非難として受容されたことは想像に難くない。しかし原水禁署名運動のような「非政治性」や「純粹性」に彩られ、また署名という懇願の形で行われた運動を望ましいものとするのは、「中立」に近いスタンスで行われるもののみを承認するような枠組みを強化することに繋がつてしまふのではないだろうか。だとすれば、原水禁署名運動の成功は、多様な運動のありようをむしろ限定してしまうものでもあつたと考えられるのである。

以上、本報告では「非政治性」を前面に押し出すことで広く支持を得る運動のスタイルが、同時に闘争の可能性を狭めてしまうような価値観の形成に寄与してしまふ危険を秘めているのではないかという問題を提起した。

デリダ・ゲーム理論・正力松太郎

野坂 昭雄

今回の報告は、山本昭宏さんが企画してくださったワークショップ「被爆の記憶と原子力の夢——原爆文学から問いなおす——」の趣旨に添うべくタイトルを設定したつもりだったが、かなり大風呂敷を広げたものになり、特に正力松太郎とゲーム理論にはほとんど触れられなかった。まずはその点をお詫びしたい。

発表の趣旨は、欧米の核認識と、原爆の延長線上に位置づけられる日本の核認識とのギャップを考える、ということである。ジョン・トリートは『グラウンド・ゼロを書く』の中でジャック・デリダの論文に言及している。デリダの論考では八〇年代初めのヨーロッパの核認識が示されているが、トリートは、デリダらの核をめぐる議論に日本の原爆が考慮されていないことを批判している。確かに、トリートには彼の問題意識や批評的戦略があり、またこの批判は「日本人」にはある種の慰めにもなる。だが、別の見方をすれば、デリダにとって兵器としての核とは、もはや日本に投下された原爆を起源とするような表象としては成立し得ない。その意味で、日本と欧米とで核の認識に違いがあると考えられることは可能である。

核による全世界の破滅がSFで描かれてきた欧米では、時代による違いはあるにせよ、核戦争は実際に起こり得るものとしてあった。一方の日本では、原爆投下を経て戦争放棄と非核三原則が謳われ、結果的に大戦後の世界において、核戦争の危機の当事者にはついに成り得なかった。原爆文学が、日本で正統な「文学」と認められるには、ある程度の時間



野坂 昭雄 氏

のような優れた核SFが書かれている。報告の中ではほとんど触れられなかったが、現実認識とSF的想像力はある程度、こうした作品で結びついていると考えられる。

もちろん、ボードリヤールが『シミュラクルとシミュレーション』で述べているように、核や原発を描くということが、その核をめぐる状況に対する馴致として機能することも考慮しなければならない。ボードリヤールに依れば、アメリカの原子力発電所の事故をテーマにした映画『チャイナ・シンドローム』は、最終的に発電所の事故が起こらなかったという点で、カタストロフのシミュレーションによる心理的な戦略なのである。

こうして、また核や原発の表象をめぐる問題は困難な地点に逢着したように思われる。三・一一以後の私たちは、どのようにSF的想像力が現実と交錯しているか、について慎重に考察する必要があるように思う。また、かつてSF的な想像力が核の描き方としては正しくないと認識されていた（ように報告者は感じている）が、現在、井上智徳『COPELION』のようなコミックが核の表象として主流に位置づけられるとしたら、そこにどのような力学が存在するのか、今後も考えていきたい。

最後になるが、会場で貴重な意見を下さった方々にお礼申し上げます。

第36回研究会印象記1

坂 聖太

山本昭宏氏は、一九四〇年代末から六〇年代前半にかけて広島で作られていたサークル雑誌『われらの詩』『われらのうた』を取り上げた。誌面に反映された民衆の声の分析を通じて、当時の広島市民のレヴェルでは「被爆の記憶」と「原子力の夢」の「共存」とも呼ぶべき状況が存在していた可能性が提示された。

中谷いづみ氏の報告では、従来肯定的な評価が与えられてきた原水禁署名運動の表象戦略に潜む危うさが指摘された。運動が「純粹」や「清らか」という語で修飾され、その中で「自発性」と「政治的中立」とが強調されたことは、「市民」の脱政治化と「中立」への過剰な欲望と生み出す結果となった。

海外の核SFなどを取り上げた野坂昭雄氏の報告は、全面核戦争などのカタストロフを巡る想像力が陥る陥穽を鋭く突いたものだった。シミュレーションの乱発の中で危機は訓致されていくことになり、同時に、別種の「危機」の隠蔽が進んでいく。シミュレーションと現実との関係は今こそ考える必要がある、と野坂氏は述べた。

コメンテーターを務めた川口隆行氏、福岡良明氏からは、核を巡る議論が陥る思考停止の問題や、原爆／原発を結びつける論理が抱え込む危うさの問題が提示された。その後の全体討論では、原爆／原発を結びつけることのメリット／デメリットの見極め、また両者の関係をレトリックの問題として把握することの可能性などについて論議が交わされた。

最後に、個人的な感想を記す。被爆の記憶を持つ「からこそ」原子力の夢を断念すべき／推進すべきなのか。筆者はどちらにも妥当性を見ることはできない。「被爆の記憶」と「原子力の夢」とを結びつける適切な接続詞などそもそも存在しないのではないか。ならば、両者を結びつけようとする欲望はどこから生まれてきたのか。この問いに対する答えを探すためにも、議論の場が継続することを願う。

第36回研究会印象記2

松尾 直美

私が最近「原爆文学研究会」に入会した事を誰かに話すと高確率で「旬」な分野（もしくは話題）ですね！という言葉をもたらう。「最近」というのは3・11後、つまり東日本大震災以降であり、同時に「想定外」の福島第一原子力発電所事故発生以降のことである。当然のように「原爆」と「原発」が同位に置かれることにしばしば困惑し、またそのような意図で入会したわけではないので、返答に窮する。

そんな戸惑いを感じる中、「被爆の記憶と原子力の夢―原爆文学から問い直す―」と題したワークショップが第36回原爆文学研究会にて開催された。かけられた言葉が腑に落ちないままにいる私にとっては、まさしく「旬」な発題であった。

山本昭宏氏はワークショップの発題とともに、サークル誌『われらの詩』『われらのうた』の誌面または原爆詩を通事的（1950年代と限定的ではあるが）に分析し、サークル誌における原子力平和利用に対する「期待感」を論証した。また中谷いづみ氏は、中谷氏自身のコメントにもあったように原発問題を前提としながら、普遍化された「母親」としての女性と政治的に空白もしくは中立性を持った主体としての子どもが、原水禁署名運動においてどのように作用し、または「利用」されたのかを綿密に論じた。野坂昭雄氏は核をめぐるシミュレーション小説を概観しつつ、原発と原爆（核兵器）を並行して論ずることを問うた。

入会したばかり、ということ言い訳がましいが、バラエティに富む内容についていくのがやっとな、というのが正直な感想であった。しかし、発表、コメントそして質疑応答を通して、今回のワークショップのテーマはまだまだ発展や掘り下げの価値が十分にあり、まだ半日続いても良いくらいであった。また原爆文学から「問い直す」というよりも「問い直すことは可能なのか」という新たな問いも生まれたように思う。中谷氏がコメントの中で述べたように「今」の文脈の中で「原発」を語ることにすら難しいのであるのなら、だからこそ追い続ける大きなテーマではないだろうか。

彙報

第三六回 原爆文学研究会

○日時 二〇一一年九月二十四日(土) 一四時より

○会場 京都大学文学部総合研究二号館第九演習室

○ワークシヨップ「被爆の記憶と原子力の夢——原爆文学から問いなおす——」

報告1 1950年代の広島における被爆体験と原子力への期待感

——サークル誌『われらの詩』『われらのうた』を中心に——

山本 昭宏

報告2 原水禁署名運動とジェンダー

中谷 いずみ

報告3 デリダ・ゲーム理論・正力松太郎

野坂 昭雄

(コメント 川口隆行/福岡良明)

機関誌 「原爆文学研究」 第一〇号原稿募集

「原爆文学研究」第一〇号を二〇一一年一二月に発行いたします。一〇号という節目を迎える今号には、できるだけ多くの会員のみなさまからご投稿いただきたいと考えております。本機関誌はこれまでに「原爆文学」に関する「批評」「エッセイ」「書評」「創作」を掲載してきましたが、今号では「原爆文学研究会一〇年——これまでとこれから」(仮題)と題して会員の皆さま(可能であれば全員)によるショート・エッセイ(分量は雑誌の書式で一頁未満でも可)も掲載したいと企画しております。もちろん本会の主眼となる「批評」「エッセイ」も例年以上に積極的にご投稿いただきたいと考えております(過去の研究会で発表なされた方で、また文章化されていない方も、ぜひこの機会にご投稿を「検討ください」)。第一〇号は単に活動一〇周年を記念するだけでなく、研究会の今後のあ

り方を考える上でも重要な号になると思います。皆さま奮ってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一一年一〇月中旬、データファイル(Wordか一太郎)を添

付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室

編集後記

京都での研究会には、会員以外の方も多数ご参加くださいました。この会報に原稿をお寄せくださった中谷いずみ氏と坂堅太氏も会員でないにもかかわらず原稿執筆依頼に快く応じてくださいました。本当にありがとうございました。今回の研究会に会員以外からの参加が多かったのは、初めての関西開催だったからに違いありませんが、それ以上に「被爆の記憶と原子力の夢——原爆文学から問いなおす——」というテーマが求心力を持つていたからだと考えています。3・11とそれ以前・以後の世界をどのようにとらえるべきなのか。わたしたちは、いま、どこに立っている、どこに向かおうとしているのか。この研究会での活動を通じて問い続けたいと考えています。次回は十周年記念研究会です。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>